

維新史回廊だより



第25号

2016年

3月発行

年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会

■発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課

(山口市滝町一丁目 TEL 〇八三一九三三二二六七)

維新史回廊だより第二五号をお届けします。今年一月に薩長同盟締結一五〇周年を迎えました。明治維新へと繋がる薩長同盟について岩国徴古館の松岡 智訓主任学芸員に解説をお願いしました。

薩長同盟について

はじめに

「薩長同盟（盟約）」は、長州藩の歴史のみならず、幕末維新史の中で特に重要なできごとの一つとして多くの人々に知られています。この同盟には、木戸孝允、西郷隆盛、坂本龍馬はもちろんのこと、締結にいたるまでに多くの人々が関わっていました。今年は同盟締結から一五〇年の節目の年となることから、同盟にいたるまでの経緯とその内容について紹介をしたいと思います。なお、今回は理解しやすい表現として「薩長同盟」と表記を統一しています。

Q 当時の長州藩と薩摩藩の関係は、どのようなものでしたか？

嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降、京都で大きな政治力を持っていた長州藩に大きな変化をもたらしたのが、文久三年（一八六三）八月十八日の政変でした。

この政変により京都を追われて力を失った長州藩は、その後、京都での復権を目指すための活動をおこなっています。しかし、政変以降、入京を禁じられた状態であったため、兵を率いて入京するべきという声が次第に大きくなっていきました。そして、長州藩の世子である毛利定広の上京を決定し、元治元年（一八六四）六月、先発として長州藩の家老

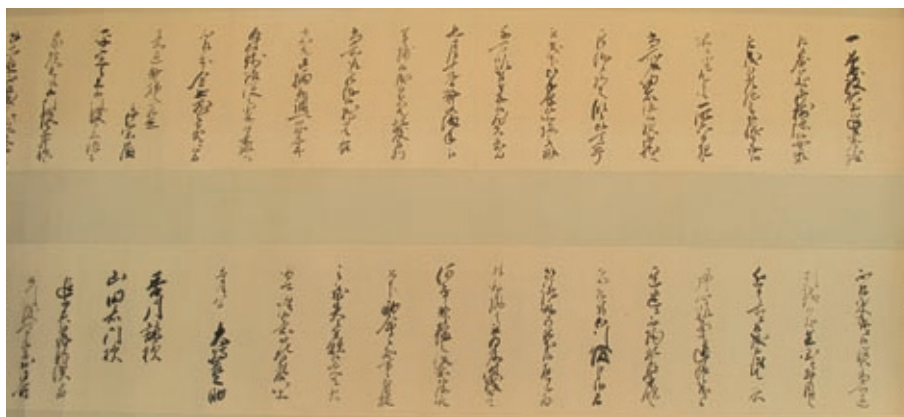
や遊撃隊が上京していきます。しかし七月十八日、定広の到着を待つことなく長州藩軍は京都へ進軍し、翌十九日、御所を守る幕府や諸藩の軍と戦って敗れて退却することとなりました（「禁門の変」）。定広や三条実美等の公卿、同行していた岩国領主の吉川経幹は、水島灘（現在の香川県と岡山県の海域）でその報告を受け、長州へ引き返しています。

八月十八日の政変や禁門の変では、薩摩藩は長州藩を排除する立場で関わっており、この当時、長州藩にとって薩摩藩は憎むべき対象だったといえるでしょう。しかしながら、薩摩藩も幕府の改革を訴えるなど、当時の日本に対する危機感や改革の必要性は、同じように感じていたと考えられます。

Q 長州藩と薩摩藩が交流するきっかけは何だったのでしょうか？

長州藩内で最初に薩摩藩と関係を築いたのは、岩国領主の吉川経幹でした。

経幹は、禁門の変で御所に発砲したことによって始まった第一次長州出兵に際し、征長軍側との交渉窓口の役割を担っており、近隣の広島藩や福岡藩に周旋を依頼しています。その後、福岡藩の喜多岡勇平を通じて薩摩藩とも接触し、高崎伊太郎や征長軍の参謀であった西郷隆盛と戦争回避のための交渉をおこないました。そして経幹や西郷等の奔走によって、第一次長州出兵は戦争を回避する形で終わることとなったのです。『吉川家文書（明治追加）』（吉川史料館蔵）の中には、この交渉の際に西郷が岩国を訪れた後に岩国藩士へ宛てた手紙も残されています。また、経幹自身も薩摩藩を信用しすぎることに注意は払いながらも、西郷が疑



『西郷隆盛（大嶋吉之助）書簡』（吉川史料館蔵）

いない人物であることを述べ
ており（「寅正月・二月七日桂
小五郎談話覚書」（吉川史料館
蔵）、その後も岩国と薩摩藩の
交流はおこなわれていました。
しかし一方で、元治元年（一
八六四）十二月の高杉晋作によ
る功山寺決起の後、新たな体制
となった長州藩の今後の方針
を示すため、高杉が元治二年
（一八六五）二月頃に記した
『回復私議』の中では、経幹の
周旋活動を批判するとともに
「薩賊ノ謀士高崎伊太郎」と記
していることから、この時点で
も長州藩における薩摩藩への
感情は、個々に大きく違ってい
たことがわかります。

Q 長州藩と薩摩藩が和解するまでにはどのような動きがあったのでし
ょうか？

元治二年（慶応元年・一八六五）頃になると、福岡藩の月形洗蔵や早
川勇、久留米藩の真木菊四郎や淵上郁太郎等が、薩長和解のための周旋
活動をおこなうようになります。その中には八月十八日の政変の際から
公卿に付き従っていた、土佐藩の土方久元や中岡慎太郎もおり、土方の
日記をもとにしている『回天実記』の元治二年（一八六五）二月八日に
も、「長府直目付井上少輔、報国隊長原田順次ヨリ面会致度旨申来、日出

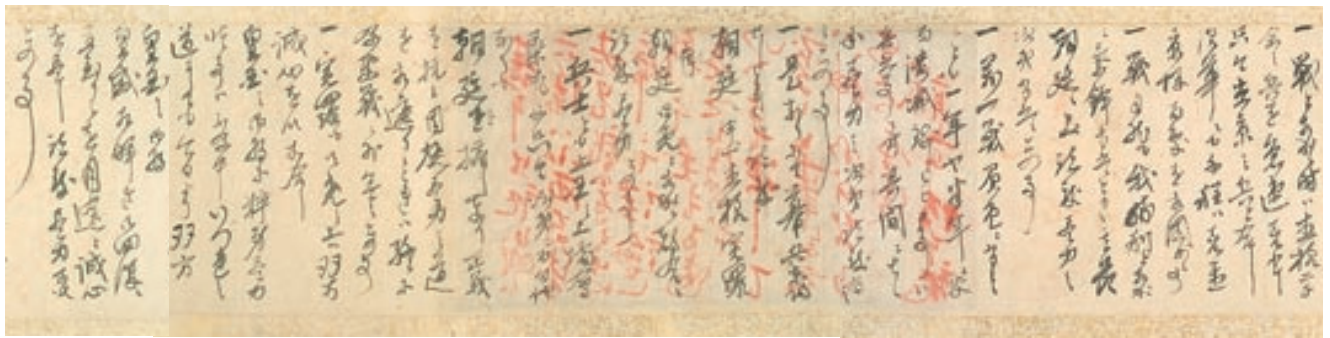
頃ヨリ出懸ケ長府役所二行キ、夫ヨリ船ニテ白石正一郎方ニ立越、井上、
原田并ニ赤根武人、三好内蔵助、吉井幸輔、大山彦太郎、大庭伝七等ト
薩長和解ヲ謀リ懇談時ヲ移ス、終テ長太郎長茂モ加ハリ小酌ス、七ツ時頃
相別シ伊勢小方ニ来リ直ニ乗船、順風ニテ夜半新泊ニ繫船」とあり、土
方や中岡（大山彦太郎）と薩摩・長州藩士等の間で、薩長和解が話し合
われています。この中には柱島出身（岩国市柱島）で第三代奇兵隊総督
の赤禰武人（赤根武人）の名前もあり、赤禰は当時、高杉の功山寺決起
により奇兵隊内での立場を失って長州藩を離れていましたが、その後も
長州藩のため、薩
長和解に関わって
いたことがわかり
ます。またこの頃、
長州藩内で薩長和
解の活動を中心
的におこなっていた
のは井上少輔等の
長府藩士でした。



赤禰武人肖像
（おおすみグループ蔵）

Q 薩長同盟はどのような内容だったのでしょうか？

慶応元年（一八六五）閏五月六日、萩藩の木戸孝允、長府藩の井上、
土佐藩の土方、坂本龍馬の会談によって、西郷が上京の途上で下関に立
ち寄って木戸と会談することが予定されました。この会談によって薩長
の関係が大きく前進することが期待されていましたが、西郷がそのまま
上京してしまったために実現はしませんでした。しかし、武器の購入に
苦慮していた長州藩に対し、薩摩藩名義での武器購入を薩摩藩が認める
など、その後も薩長の協力体制は進んでいきました。そして、慶応二年
（一八六六）一月二十一日頃（締結日については諸説あり）、薩長同盟が



『木戸孝允書簡（慶応二年一月二十三日付）（部分）』（宮内庁書陵部蔵）

結ばれることとなります。

同盟締結当時の内容を記したものは残されていませんが、その内容は宮内庁書陵部が所蔵している『木戸孝允書簡（慶応二年一月二十三日付） 坂本龍馬裏書（同二月五日）』で確認をすることができます。これは、同盟が締結された後、木戸が内容をまとめて坂本へ送り、坂本が内容を確認し、「表に御記被成候六條ハ、小西両氏及び老兄龍等も御同席ニて談論せし所ニて、毛も相違無之候、後來といへとも決して変り候事無之ハ神明の知る所ニ御座候」と、小松帯刀（たてわき）（小）、西郷（西）、木戸（老兄）、坂本（龍）が同席の上、議論した内容に相違がないことを認めて木戸へ返送したものです。そこに書かれている条文は次の六条です。

一 戦と相成候時ハ、直様二千余之兵を急速差登し、只今在京之兵と合し、浪華へも千程ハ差置、京坂両處を相固候事

一 戦自然も我勝利と相成候氣鋒有之候とき、其節 朝廷へ申上、訖度尽力之次第有之候との事

一 萬一戦負色ニ有之候とも、一年や半年ニ決而潰滅致し候と申事ハ無之事ニ付、其間ニは必尽力之次第訖度有之候との事

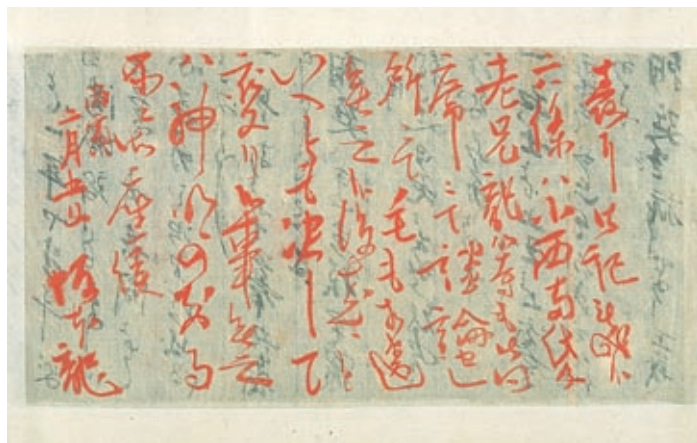
一 是なりにて幕兵東帰せしときハ、訖度 朝廷へ申上、直様冤罪ハ從 朝廷御免ニ相成候都合ニ訖度尽力との事

一 兵士をも上国之上、橋会桑等も如只今次第二而、勿体なくも 朝廷を擁し奉り、正義を抗ミ周旋尽力之道を相遮り候ときハ、終に及決戦候外無之との事

一 冤罪も御免之上ハ、双方誠心を以相合し、 皇国之御為に粹（ママ）身尽力仕候事ハ不及申、いづれ之道にしても今日より双方 皇国之御為 皇威相暉き御回復ニ立至り候を目途ニ誠心を尽し、訖度尽力可仕との事

内容をそれぞれ見ていくと、

一条は長州藩と幕府が戦争となった場合には、薩摩藩が兵を出して京都と大坂を固めて支援するというものです。二条と三条は戦争の勝敗に関わらず、長州藩の冤罪解消のために薩摩藩が朝廷への働きかけに力を尽くすというもので、四条では、戦争にならなかつた場合にも薩摩藩が同様にすることということが書かれています。五条では、幕府軍が上京し、一橋（橋）や会津藩（会）、桑名藩（桑）も薩摩藩の周旋活動（長州藩の冤罪を解消す

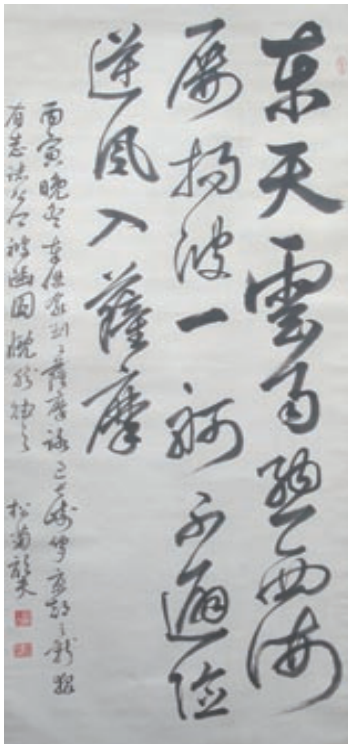


『坂本龍馬裏書（慶応二年二月五日）』（宮内庁書陵部蔵）

るための」を妨げる場合は、決戦するほかないとしています。六条はま
とめの文章として、長州藩の冤罪が解消された場合は当然のことながら、
今日から薩長が力を合わせて日本国、皇威が輝くことを目的に心と力を
尽くすという両者の根本的な考えを示しているものです。

これらの条文から、この同盟は積極的に幕府と戦うことが第一の目的
ではなく、あくまでも長州藩の冤罪を解消することが第一の目的であっ
たことがわかります。長州藩においても、慶応元年（一八六五）閏五月
二十日に「幕軍もし来たらば死をもつてこれを防ぐ」と、「決死防戦する」
（『防長回天史』）ことを決定しており、防戦を前提としていました。た
だし、この同盟によって、長州藩ではより強固な決戦体制が構築され、
慶応二年（一八六六）六月、第二次長州出兵（四境戦争）に突入してい
くこととなるのです。

同年八月十二日には、西郷の弟西郷従道が岩国を訪れ、岩国藩士や萩
藩の広沢真臣、諸隊長官の河瀬安四郎等と会談しています。また、戦争
が終息してきた十月になると、薩摩藩が長州藩へ修交のための使節を派
遣し、長州藩からは十一月に木戸が派遣されるなど、同盟をより強固な
ものにしていく動きとなりました。この時に木戸が詠んだ詩には「東天
雲雨悪 西海風揚波 一舸不避險 逆風入薩摩」とあり、世の中の厳しい
状況にも逃げることなく立ち向かい、薩長同盟を強固なものにしてい



『入薩摩詩』
（木戸孝允書）
（岩国徴古館蔵）

くという木戸の強い意志が伝わってきます。そして、木戸の意志のお
り、薩長同盟は強固なものとなり、慶応三年（一八六七）十二月に王政
復古を成し遂げ、新しい時代に向けて世の中は加速していくこととなる
のです。

おわりに

薩長同盟が幕末維新史の中で重要なできごとであったことは最初に述
べたとおりですが、締結までを追っていくと、支藩・末家等、長州藩の
一部で始まった動きが長州藩全体の動きとなっていくことがわかりま
す。それを考えると、木戸や西郷、坂本等の著名な人物だけではなく、
長州藩の政治機構が本藩、支藩等の様々な考えや行動について議論でき
る体制を備えていたことも、薩長同盟の実現において重要な背景だった
といえるのではないのでしょうか。

〈参考文献〉

- 『防長回天史（復刻版）』（マツノ書店 二〇〇九年）
- 『吉川経幹周旋記』（日本史籍協会 一九二六、一九二七年）
- 『薩長盟約と下関―長府藩士と龍馬・慎太郎のキセキ』（下関市立長府博
物館 二〇一二年）
- 青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- 三宅紹宣『薩長盟約の歴史的意義』（『日本歴史』六四七号 二〇〇二年）
- 三宅紹宣『薩長同盟』（『萩ものがたり四十七』一般社団法人 萩ものが
たり 二〇一五年）

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資
料館、県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームペ
ージ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。
次号は、今年九月発行の予定です。どうぞ御期待ください。